

〈史料紹介〉

## 安孫子家文書から見る安孫子久太郎と 須藤余奈子の出会い

鈴木 麻倫子

### はじめに

本稿の目的はサンフランシスコ日本人移民社会の発展に多大な貢献をした安孫子久太郎（以下、久太郎）と妻である須藤余奈子（以下、余奈子）の残した史料 “Finding Aid for the Abiko Family Papers, ca. 1890–1944”（以下、AFP）を紐解き、先行研究で詳細にされてこなかった2人の出会いと結婚に至るまでを直筆の史料から描くことである。

“Finding Aid for the Abiko Family Papers, ca. 1890–1944” とは

カリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館のスペシャルコレクション No. 1690として1992年から同館に所蔵されている。史料の寄贈者は安孫子夫妻の息子泰雄の妻、リリー・安孫子氏である。史料はマイクロフィルム化され、日本では国会図書館憲政資料室で閲覧が可能である。総ボックス数は46、その内2ボックスはオーバーサイズ史料である。久太郎、余奈子、長男の泰雄所蔵の手紙、日記、ノート、写真、世界大会や会議などのパンフレットなどを中心に収蔵している。

2015年11月現在、手元にAFPの3/4を入手済みである。これらはすべてPDF化し、翻刻の作業を進めている。

AFPで特筆すべきは余奈子の記した日記である。Box 1–5 に収録されており、古いものは1891年7月15日で、中間抜けや判読不明部分もあるものの1944年までの分が残されている。内容は備忘録的な要素が多いものの、記述内容から人物相関、関係事業の内容など読み取れる。しかし余奈子の字が個性的である点や独特の書体のため、解読するのに非常に時間を要している。Box 6–12には華族女学校時代の教科書、アドレス帳、結納目録、安孫子家訪問台帳、各会議や機関のパンフレット等が

収録されている。

Box13-29までは余奈子と久太郎宛ての書簡が納められており、家族や友人、共同事業者からのものがある。この書簡群でかなりの分量を占めるのは余奈子の養母須藤八重野からの手紙である。1896年から1923年までが収録されている。津田家の近況報告や、女子英学塾の様子などを中心に報告されている。

Box30-32は日米新聞見学団のスクラップブックやアルバム、Box33は関東大震災によって被災した女子英学塾救済関連の史料が収録されている。この史料は先行研究でも使用されている。

Box34には久太郎の履歴書や勸業社について故郷の義兄に書き送った書簡、久太郎の葬儀に関するはがきなどが収録され、Box35-38には日米新聞に関する写真アルバム、ストライキドキュメント、ビジネス記録、給与支払いに関する控えなどが納められている。

Box36-39は安孫子夫妻の息子泰雄に関しての記録を収録。Box40-Box46は写真が収録されている。

本稿の史料を紹介する前に、久太郎と余奈子の出会いまでの略歴と研究動向を紹介しておく。また、2人を取りまく人々の関係性を明らかにするため、人物相関図を作成した。こちらを参照しながら読み進めていただきたい。



### 安孫子久太郎

1864（元治1）年6月23日、新潟県北蒲原郡水原町字外城に生まれる。父小林徳四郎、母いし子の長男。出生後、母いし子が死去したため、母方の祖父安孫子彦一郎方に引き取られ養育される。1870（明治3）年頃より諏訪神社の宮司主催の塾で文学を学び、1872（明治5）年頃より東京帝国大学教授星野亘が経営の漢学塾に学ぶ。学制の改正に伴い水原にできた小学校に入学、1876（明治9）年まで学ぶ。卒業後は家業の蠟燭商を手伝っていたが、1878（明治11）年頃水原町に英国人医師で宣教師のパームがキリスト教講習所を開設し、久太郎も入講する。久太郎の禁酒・禁煙謹厳の姿勢はこの当時に形成されたものである。

1882（明治15）年5月親戚の宇尾野藤八<sup>1)</sup>と友人佐藤（大倉）文二<sup>2)</sup>と新潟を出奔。中江兆民の佛学塾にて食客生として初めて外国語を学ぶ。一年後には塾が経営困難となり退塾。叔父からの学資提供を受けて漢学者三島長州の塾に入学。その後、矢野武雄経営の三田英学塾にて英語を学ぶ<sup>3)</sup>。

翌1883（明治16）年京橋区新肴町教会<sup>4)</sup>（長老派）奥野昌綱牧師（以下、奥野牧師）より洗礼を受ける。同時に海軍士官瓜生外吉<sup>5)</sup>（後の海軍大将

1) 宇尾野藤八…1862（文久2）年生まれ。東京に出奔した後、東京高等商業学校を卒業後米国へ留学。その後1890（明治23）年1月28歳の時に新潟商業高等学校の第5代校長に就任。1893（明治26）年秋まで同校の再建に尽力する。国立第四銀行の重役に転じ、1896（明治29）年12月には副支配人、1898（明治31）年には支配人に昇格、その後監査役に就任。（参照：/http://ashiwara.jp/koureki/1890-01.html/ 新潟商業歴史図説/電子校歴室、『第四銀行百年史』株式会社第四銀行、昭和49年5月刊）

2) 佐藤（大倉）文二…1862（文久2）年12月9日生まれ。北越水原町神職佐藤清雄の次男として生まれる。久太郎と同じく星野亘の下で経史を学ぶ。1885（明治18）年から6年間渡米。パシフィック大学で学ぶ。在米時は福音会会員。帰国後1892（明治25）年師匠である二宮安次の紹介で大倉孫兵衛の養子となり、娘美智子と結婚、分家。1898（明治31）年12月大倉洋紙店支配人となる。（打越孝明『大倉山論集No. 54』大倉文化科学研究所、2008年3月、253～295頁）

3) “Abiko Family Papers Collection 1690”、BOX34 Folder 1、「安孫子久太郎履歴」

4) 1879（明治12）年12月13日群羊社の青年11名と小崎弘道により、東京で初となる会衆派教会として設立。小崎はこの時牧師として接手礼を受ける。

5) 瓜生外吉…1857（安政4）年1月2日～1937（昭和12）年11月11日、加賀大聖寺藩士瓜生吟弥の次男として生まれる。1875（明治8）年6月アメリカに派遣され、アナポリス海軍兵学校で砲術を学ぶ。YMCAの代表となり、また津田梅子等と共に開拓使派遣留学中だった永井繁子（益田孝の妹）と知り合い、帰国後に結婚。1892（明治25）年にはフランス大使館付武官として赴任、1896（明

瓜生男爵)より日曜学校で教えを受ける。

1884(明治17)年12月22日奥野牧師の斡旋によりサンフランシスコ福音会東京支部の修学生<sup>6)</sup>として渡米。1月3日横浜より、英国船3500トンのゲーリック号にて出港。

同月23日桑港埠頭に上陸<sup>7)</sup>。渡米後すぐに福音会桑港Lincoln Grammar Schoolに入学。福音会メンバーとして活動をしていく。1897(明治30)年カリフォルニア大学パークレ校に入学、卒業した形跡は残っていない。

1899年4月3日には『桑港日本新聞<sup>8)</sup>(ジャパンヘラルド)』と『北米日報』を融合して『日米』を創刊し、異母弟の小林彦次郎<sup>9)</sup>を社長、貞治<sup>10)</sup>を支配人とする。同年には日米金融社(後の日米銀行)を植田憲三らと創設し、グループの一員となっている。1902(明治35)年日本人移民の定住を促進するために、職域開拓と職の請負・紹介を担う日米勧業社を設立。1904(明治37)年には株式会社日米勧業社に発展改組する。

1905(明治38)年日本人移民の個人情報を記載した『日米年鑑』を発行、1918年まで続刊する。1906年には日本人移民に対し、農業地を提供するために大和コロニー第1号の土地2,500エーカーを購入し、1月には開拓民を送り込んでいる。農業指導にあたった津田次郎<sup>11)</sup>によれば、大和コロニーでの農業は、困難を極めたと語っている<sup>12)</sup>。しかし日本人は不撓不屈の精神で開墾し、大戦景気とあいまって農家は好成績を納め生活状況は著しく向上する。

治29)年帰国。1907(明治40)年男爵となる。(富田仁:編『新訂増補海を越えた日本人名事典』2005年7月25日、日外アソシエーツ、154頁)

6) 同志社大学人文科学研究所編『在米日本人社会の黎明期『福音会沿革史料』を手がかりに』現代資料出版、1997年2月25日発行

7) 岡省三『北米毎日』「安孫子久太郎伝②」1980年5月9日、2頁

8) 1897(明治30)年、岡田溪水が1896(明治29)年に興した『ジャパン・ヘラルド』を久太郎が買い取り『桑港日本新聞』として再興。(佐渡拓平『気骨のジャーナリスト尺魔が刻したカリフォルニア移民物語』1998年12月20日、亜紀書房、211頁)

9) 小林彦次郎…久太郎の父が再婚相手との間にもうけた義弟。

10) 小林貞治…前掲注9に同じ。

11) 津田次郎…津田仙の次男であり余奈子の兄。同志社英学校を卒業後、クラーク博士の斡旋でマサチューセッツ農科大学に留学する。後に久太郎が立ち上げた大和コロニーで農業指導を行うほか、日米新聞社顧問にも就任する。

12) 岡省三「大和コロニーと安孫子久太郎」『海外ヘユートピアを求めて亡命と国外根拠地』田村紀雄編、1989年12月15日、社会評論社、91頁

1907年には米国殖産会社を設立し本格的に土地購入事業を始める。この会社設立に伴い資金を収集するため、各方面へ協力要請に出向くのだが、1908（明治41）年その一環として日本に帰国する。

久太郎の帰国に合わせて帰朝歓迎会が開催されることとなる。1908（明治41）年11月14日午後5時から芝公園紅葉館にて開催される事となり、11月9日18名の発起人から招待状が送付される。この招待状をきっかけに久太郎と余奈子の人生が交わる事となる。

### 須藤余奈子

1880（明治13）年12月6日、津田仙（以下、仙）と妻初子の五女として生まれる。1890（明治23）年、仙の妹須藤八重野と須藤米吉の養女となる。一時期函館で過ごしている。1899（明治32）年7月華族女学校を卒業後、姉の津田梅子（以下、梅子）が創立した女子英学塾で学ぶ。卒業はしておらず、そのまま女子英学塾にとどまり、梅子の傍らで仕事をしている。1907（明治40）年から1908（明治41）年にかけて梅子と共に欧米各国を訪問するほか、基督教女子青年会の仕事にも参加していた。

1908（明治41）年秋、28歳の余奈子は久太郎と出会い、1909（明治42）年2月に久太郎と結婚し渡米する。翌年には長男の泰雄が誕生。1912（明治45）年に桑港日本人基督教女子青年会（以下、桑港YWCA）の創設に尽力、後に日系二世のための見学団実施や久太郎から日米新聞事業を引き継ぎ運営に携わることとなる。

### 久太郎・余奈子の研究動向

久太郎の研究は北米における初期日系人社会の形成、在米福音会の発展、日本人排斥運動への対峙、日系新聞の発行など多岐に渡っている。

先行研究の多くが久太郎の略歴を記すが、その典拠は岡省三氏（以下、岡氏）が『北米毎日』に1980年5月9日から25回に渡り連載した「安孫子久太郎伝」によるものである。この記事は岡氏が久太郎の息子泰雄からのインタビューや、久太郎の同僚が残した記録などを手がかりに記したものである。

実際の記事では久太郎の生い立ち、渡米の経緯、大和コロニー設立を章立てに執筆されており、同内容の英語版も掲載されていた。

その中には妻余奈子との結婚経緯などにも触れられており、安孫子夫

妻の出会い・結婚についてはこの記事がその後の研究ソースとしての重要なポイントとなっている。

一方、余奈子の研究はほとんどされていない。渡米以前は姉梅子の片腕として働く事が多かった。津田梅子研究の中で特に余奈子が注目されたのは関東大震災によって倒壊した女子英学塾再建への尽力である。これについては『津田梅子を支えた人々』（有斐閣、2000年）で飯野正子氏が「安孫子余奈子—関東大震災後の塾再建に注いだ情熱」で論じている。

また、山本恵理子氏が“Nikkei Heritage”に“The Heritage of an Issei Lady: Yonako Abiko’s Vision for Global Connections (1880–1944)”（2010年1月19日）と題し余奈子の略歴とアメリカでの主な業績の紹介をしている。

余奈子はアメリカで桑港YWCAの設立や日米新聞主催の日系2世のための見学団実施、久太郎の死後は日米新聞社社長にも就任しているが、その功績にスポットが当たる事はほほない人物である。桑港YWCAの開設に至っては河井道子（以下、道子）の功績ばかりが注目されているが、実際に設立に向けての準備では余奈子たち米のYWCA会員の貢献が大きい。

今後は史料を紹介すると共に、今までスポットを浴びることのなかった余奈子という女性の人生を、20世紀初頭の異文化間交流と教育という視点から明らかにしていこうと考えている。

本稿では史料群の中から先行研究で詳細にされてこなかった、久太郎と余奈子の出会いから結婚に至るまでの過程を示す史料を紹介する。

史料はA・B・C群と分けている。A群は余奈子の日記、紙数の都合で結婚に関する記載を抜粋し掲載している。1908（明治41）年11月から余奈子の日記には初見の人物名や兄次郎がよく出てくる。それに併せて久太郎との面会が増え、日記にはプロポーズをされた事を伺わせる記述や久太郎からの来信、結婚の準備、式当日の記述が残されている。

図①②は史料A群から抜粋したものである。久太郎からの招待を受け大倉邸で会食をしたことが伺えるものと、結婚式当日の日記である。この様な日記を余奈子は数多く書き残している。

B群は1909（明治42）年1月に久太郎から余奈子へ送られた3通のラブレターである。図③は久太郎から余奈子に送られた手紙の1通目であ

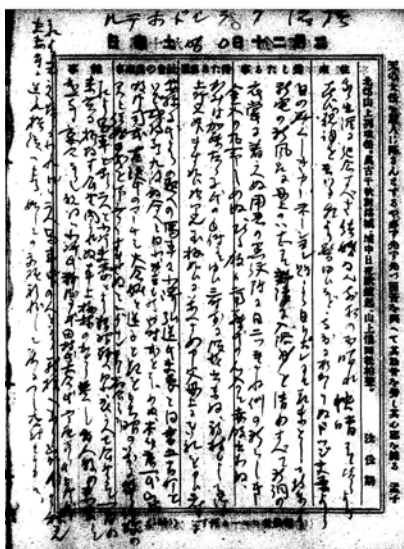
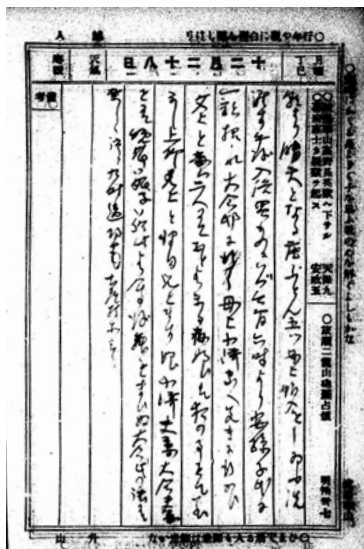
る。久太郎の手紙からは、事業をサポートするパートナーとして余奈子に大きな信頼と期待を寄せている事が分かる。余奈子は期待に応え、多くの事業に関わっていく。二人の結婚はサンフランシスコ日本人移民社会、特に移民女性にとっては大きなターニングポイントである。本稿では触れないが、渡米後の二人の事業については今後明らかにしていく。

C群はその他文書とし、久太郎帰国の歓迎会はがき、余奈子の義兄上野栄三郎からの手紙を紹介する。

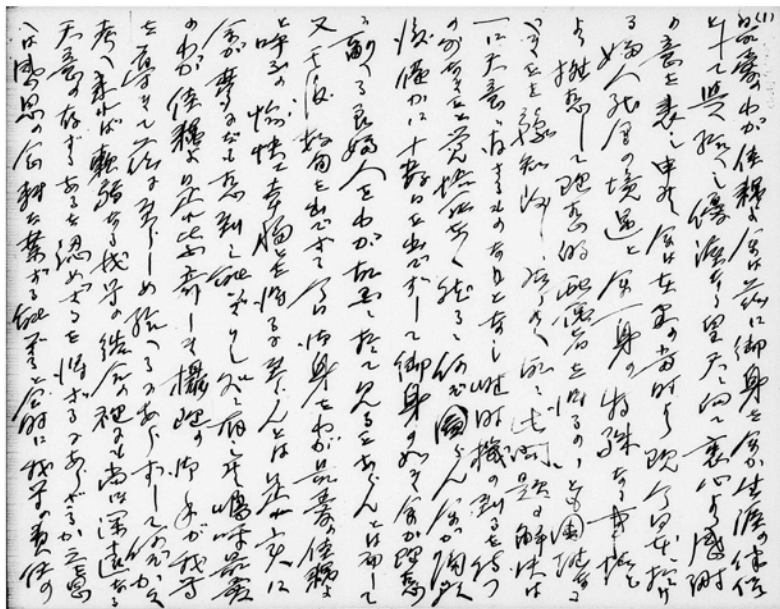
また、図①-⑤の画像はAFPマイクロフィルムをPDF化したものを掲載している。



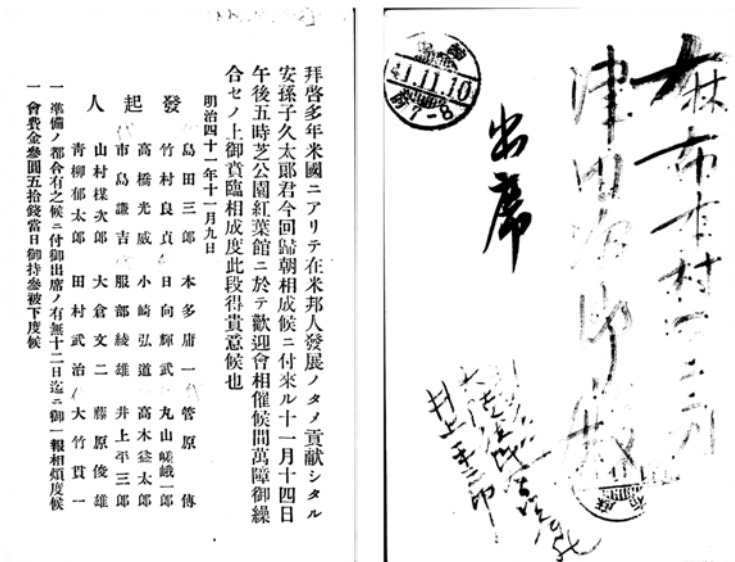
図①史料A-⑭1908年12月28日大倉邸で会食 図②史料A-⑳1909年2月20日結婚式当日



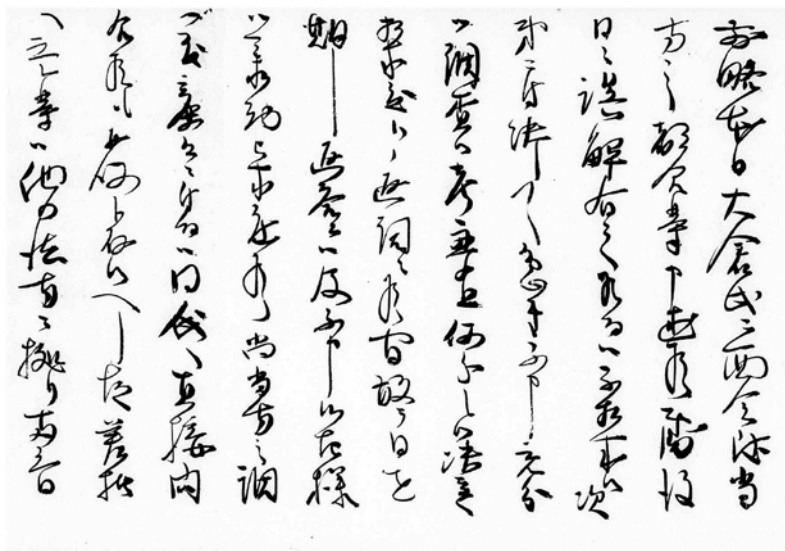
図③ 史料B-① 1909年1月1日 久太郎から余奈子への手紙（1枚目）



図④ C-① 1908年11月10日 久太郎歓迎会の招待はがき



図⑤ C-② 1908年12月15日 上野栄三郎から余奈子への手紙（1枚目）



## 史料編 凡例

この史料編は Abiko Family Papers Collection 1690 から Box 2 Folder 1、Box12Folder 3、Box19Folder 5、Box21Folder 1 の中から抜粋した史料を翻刻したものである。

- 旧漢字は原則として常用漢字を用いた。日記の読み下しに当たっては読みやすさを重視するため、一部の漢字・カタカナを平仮名に改め、送り仮名、句点を振るなどした。

Ex.) こころ → ここに

Ex.) 給ふ → 給う

Ex.) 今日ハ → 今日は

- 固有名詞等については適宜注釈をつけた。

- 現時点で未解読箇所については■で表記する。

- 史料の汚れ・劣化による判読不能箇所については（以下、○○字程判読不能）と記す。

## 史料目次

史料A群 66頁～76頁

史料B群 77頁～84頁

史料C群 85頁～86頁

<b>史料A群 余奈子の日記 1908(明治41)年11月～1909(明治42)年2月 関係日記抜粋</b>
--

A-① 1908年11月7日 土曜日

宮様御休み。朝、たつとあまた洗濯す。午後入浴す。夜生徒料理あり。  
夜モース嬢と母娘と馬車にて靖国神社祭禮を見に行く。  
次郎兄上米国加州人名録持参。御出で。  
西村せい子氏より返事くる。

A-② 1908年11月26日 木曜日

鎌倉母上<sup>13)</sup>、永く御不快のよし。  
次郎兄上、かの事急ぎ御出で。  
裁縫する。

A-③ 1908年12月3日 木曜日

朝、おけいこ事し、父上お障ありて今日お臥床。  
高輪に母上と十一時に行く。途中、毛利公爵邸に  
毛利正子夫人を訪問し松御殿へ先きに行く。  
夫人に面会。それより上野へ行く。今日小崎弘道<sup>14)</sup>氏と夫人<sup>15)</sup>に

13) 鎌倉母上…津田初子。津田仙の妻であり、梅子や余奈子の実母。余奈子は1890(明治23)年10歳の時に須藤家の養子となっているため、初子の事を鎌倉母上と表現している。

14) 小崎弘道…藩校時習館で学び、1871(明治4)年10歳の時熊本洋学校に入学。ジェーンズより薫陶を受け1876(明治9)年4月3日洗礼を受ける。同年同志社英学校に入学。1890(明治23)年同志社2代目総長となる。1879(明治12)年12月13日群羊社の青年11名と会衆派教会として東京に初めて新肴町基督教会(霊南坂教会)を設立。牧師として接手札を受ける。1880年(明治13)神田乃武、井深梶之助、植村正久らと協力し東京基督教青年会(YMCA)創立、会長に就任。同年10月『六合雑誌』創刊。1881(明治14)年津田仙の姪っ子千代子と結婚。1882(明治15)年東京第一基督教会牧師となるも翌年辞任。キリスト教書出版販売の目的で警醒社を設立。『東京毎週新報』(のち『基督教新聞』『東京毎週新誌』『基督教世界』)を刊行。1897(明治30)年同志社を辞任。京橋教会牧師となる。1898(明治31)年『新世紀』を刊行。(日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年2月)

15) 小崎千代子…1863(文久3)年8月8日-1939(昭和14)年5月14日、余奈子のはとこ。日本基督教婦人矯風会会頭。江戸小石川村にあった徳川幕府の直参の岩村家の長女として生まれる。明治維新後、幕臣たちと静岡に移住する。1871(明治4)年に上京する。1876(明治9)年にメソジスト派の宣教師ジュ

安孫子久太郎氏を同伴大倉文二氏もつれ来る。伝道前  
晩飯をともにす。夜電車にて帰る。小崎夫人・河井  
氏の事問う。

A-④ 1908年12月10日 木曜日  
夕刻琴姉上<sup>16)</sup> 御出で。小崎氏へ昨日梅姉上<sup>17)</sup> へ先方の  
来訪の事を申され、まずはハガキ出しと云う。

A-⑤ 1908年12月11日 金曜日  
朝、藤堂家。午後、安孫子氏姉上方へ訪問のした  
くせしも、琴姉上ハガキ到着にて、三時小崎氏  
より電話にて明日となる。  
夜考へ返す。父母を■■り神の御考えを伺う。

A-⑥ 1908年12月12日 土曜日  
朝、考へぬ。今日、お目にかからぬ方よろしからんやとまで思わ  
ば■■しとなからんとて、待つけぬ。大倉氏同伴にて  
安（孫子）氏御出。梅姉上と父上<sup>18)</sup> に初対面。雑煮食す。

A-⑦ 1908年12月16日 水曜日  
上野兄上<sup>19)</sup>、昨夜事務所にて大倉氏へ面会のよし。其他の  
川上氏へ伝教の件に付き申しこさる。

---

リアス・ソーバーより洗礼を受ける。1883（明治26）年、海岸女学校（後の青山女学院）を卒業し、小崎弘道と結婚する。道雄、安子（岩村信二の母）が生まれる。1886（明治19）年、矢嶋樺子の運動に賛同して婦人矯風会の設立に尽力し、役員になる。1902（明治35）年より小崎弘道が日本組合基督教会霊南坂教会牧師になると、牧師夫人として牧会に協力する。音楽と英語の教師も務めた。また、霊南坂教会附属幼稚園の開設と共に園長になる。1921（大正10）年には矢嶋の後を受け継いで日本基督婦人矯風会の会頭に就任する。（日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年2月）

16) 上野琴子…津田家の長女。夫は同志社英学校を卒業後、実業家となった上野栄三郎。

17) 津田梅子…津田家の次女。日本女性初の米国留学生。1900年に女子英学塾を創設。

18) 須藤米吉…津田仙の妹八重野と結婚。余奈子の養父となる。

19) 上野栄三郎…同志社英学校卒業後、津田仙の開いた学農社に教員として赴任する。後に仙の斡旋でアメリカに留学。帰国後、余奈子の姉琴子と結婚する。

A－⑧ 1908年12月17日 木曜日

朝、新渡戸家へ行く。ミセス・ニトベへ相談す。ひるに帰宅せしに山鹿夫人<sup>20)</sup> あい至る。今日は■席を運びとのもの事ありし所へ、上野姉上御出で。いづれも■し用事かの事にて由意を聞く事、及び面会面談の事申さる。電話かけぬ、大倉氏へ。午後三時半頃。  
安孫子氏来訪。面会すれば母上の事など給う。相談など同情し給う旨及び事業抱負希望話さる。夕食の約あればとて御帰り。

A－⑨ 1908年12月20日 日曜日

神に祈る。教会へ行く。山鹿夫人にあう。決意の事一寸（ちょっと）申置く。

光崎■枝子と■子氏、高津紀世と御出ルて山鹿牧師<sup>21)</sup> 尔紀代氏紹介それより、■■二人宅へ御同行いろいろ話す。食事後花子は母上へあい参る事と花子氏の事相談す。三時迄雨ふる。  
■にいろ■■■決意す。

A－⑩ 1908年12月21日 月曜日

朝父母上に御旨伺うに間とれぬ。■■あらば氏御出で。今日は安孫子氏へ■■の御返事給うべし。十時高輪にて御面会の約あり。到りしに、はや待ち居られ給う。御面会申上ぐ。  
礼■■■■。上野姉上■■■母と四人にて、御雑煮しっかうと■と賀すにて肴にて食事。午後姉上御■つけになりても話し居られ五時頃御帰り。鎌倉母上の御病源も虫とわかり御快方の方より十一日昨日御出になりし。琴姉上より伺う。  
夕帰宅。神様に感謝の祈りを捧ぐ。

---

20) 山鹿夫人…日本のメソジスト牧師山鹿旗之進の妻。

21) 山鹿旗之進…1860（万延元）年2月16日～1954（昭和29）年4月1日、日本のメソジストの牧師、教育者。文筆家。弘前藩の江戸藩邸に生まれる。1903年に九段教会（現、日本基督教団九段教会）に赴任する。1914年には横浜聖経女学校の教頭になる。1923年教師を引退し、横浜に住んで文筆活動を行った。『六合雑誌』、『福音新報』、『教界時報』、『護教』、などに寄稿した。

A-⑪ 1908年12月22日 火曜日

朝藤堂家へ行く。表の西洋間にて御けいこいた■すいなく■しをしる  
銚子氏より御心入り布地一反もらい、それに米を肴料もらい食事後  
今日にて今年も終りのけいこなりし。

帰宅。午後、琴姉上今日小崎夫人方へ御出■■委細此方より  
安孫子氏よりの申込承諾の返事申伝上ぐ。承知のよし。食事さし上ぐ。  
今日安（孫子）氏は藤沢に行かれ、明日小崎氏へ返事聞き、かつ今後の  
相談に御出のはづ。

A-⑫ 1908年12月23日 水曜日

買物にいでクリスマスのしたくす。

朝■■なしと買物に行く。最初三越へ行く。そこにて大倉氏  
にあふ。廿六日頃安孫子氏が参り一族を招待せんとの内意  
話さる。午後一時、英学塾のクリスマス話会講堂に開くに  
式あり綱崎牧師の朝鮮談あり余興あり。それより講談師の  
神崎与五郎と馬喰の与五郎の話あり。夕刻教会。

A-⑬ 1908年12月26日 土曜日

朝より支度す。今朝小崎夫人、安孫子久太郎氏より家への結納御持参なり。

目録をそえ金時計に金銀幾久敷拝受す。此方よりは、やはり目録  
名ものせて祝鬘斗相添へ贈る。小崎夫人へ寿御飯餐す。父上  
御■■だん■久より、すべてとりすませぬ。早速時計身につけて見ぬ。  
午後し■■■何日米国ハーツホーン<sup>22)</sup>氏伺、姉上其他■■氏より本贈り  
ミスビーチよりもクリスマスグリーティング来る。  
夜平田とし子氏御出。  
廿八日安氏よりの招待、小崎夫人伝へ給う。

22) アナ・C・ハーツホン…1860年1月8日フィラデルフィア生まれ、1957年10月2日フィラデルフィア没。1889年2回目の留学中であった梅子と知り合う。その後、梅子と女子英学塾に尽力する。1923年の関東大震災で被災した学校を再建すべく、渡米し余奈子と共に臨時救済委員会を設立し寄附をつるなど女子英学塾のために長年働き1941年帰国する。

A-⑭ 1908年12月28日 月曜日

朝より晴天となる。座ふとん五ツ母上購入をし給う。洗濯す。午後入浴買ものにいづ。午後より安孫子氏に一族招かれ、大倉邸に行く。母上小崎家へ先きに行給ふ。父上と■■■二人にて、あとより来る。梅姉上にて夜の事にて御出なし。上野兄上と津田兄上、ます姉上、小崎夫妻、大倉夫妻とにて晚餐。御娘子御■■■より食事後舞をまいぬ。大倉氏の話にて楽しく話し、九時過ぎ帰宅。土産持参にて。

A-⑮ 1908年12月29日 火曜日

今日は雨。安（孫子）氏は今朝越後へ御帰国のはづ。朝より片付けものす。金子■■■給う。■■■とみ子へ手紙かく。父母よりの■■■婚約の事報告す。夕川崎氏と斎藤氏を母上は晩食に招く。

A-⑯ 1909年1月7日 木曜日

七草の御かゆ祝う。まり姉上大井の兩人とそこへ光高来訪。母上よりクリスマスと姉上より祝品もらい、それより寺崎家へ一寸（ちょっと）行く。■■■子氏へ写真抜てさし上ぐ。それより渡辺へ行。■■■村し希子子土■■■のよしにて不在。初子方へ一寸より、文子をつれし伺せにし途にあい挨拶に■■■へ来る。梅姉上■■■の如く、御出の所ます姉上同かえりにて御出とて、おちあう。寺崎すみ子進物持参御出。又水に■■■りを下さる。食事して母上に御いとまして、梅姉上と一時半の汽車にて帰参せる。ちちは直ちに■■■町へ参り御品川にて下車して高輪の姉上方へ行。御病気大ニ御快し。大井お■■■やさん御出なし。夕刻五番町へ帰り夕食事後入浴す。安氏の手紙の事など姉上へ話す。

A-⑰ 1909年1月9日 土曜日

朝より手紙かきエルキントン氏などへ報告状出す。母上麻布より高輪へ年賀方々参り事の■■■二行給ふ。夜御帰り



ゆきふりはじめぬ。生徒■■く婦塾、渡辺百合子<sup>23)</sup>・小室氏其他  
数名。

新潟県安孫子より来状御招待状あり。■■での礼申こされ  
ぬ。御婦参約十五頃との御報告申せし。

ミセス新渡戸朝来訪姉上の■■■■にて母上らとあう。

ミスエブレヘー■■出す。

A-⑱ 1909年1月14日 木曜日

十九日ミス・ウエストンの午後の相■■御状出す。

朝、伊太利セアナより小包ととき大■■へパンクラテの菓子二缶  
入る。ミス・マーガレットパミアレより然る御送り■■■とわる。  
絵はがきと■■名封じあり。厚意■■■■しく■■ふ。

十一日来日伊太利より発送されしものなり。

きく事田中八重母と（以下5文字程解読不能）桜井先生<sup>24)</sup> 来訪。

梨本宮妃殿下御渡欧の途二のぼらせ給う。

三越より参り紋付過日注文せしに出来上り参り重色

白梅の■■■■金■■よく立■■して出来上がる

夜新潟市へ出で（以下3文字程判読不能）安孫子氏より来状。今朝の汽  
車■■■■の汽車にて御帰京のよし。

A-⑲ 1909年1月19日 火曜日

朝用事す。母上御快し。午後一時より二時迄の間爾安氏御出の約。

朝電話かけてやくそく姉上へ方を申上ぐ。二時前御出にて姉上の室にて  
二人■■■会談す。母上も御出にて色々式の事、日の事、招待の事相談。

参考に母上の保存し置給いし招待状の■■をご覧に入る。姉上はウェスト

23) 渡辺百合子…1904年女子英学塾入学。1911年米国インディアナ州にあるクエーカーの共学校、アールム大学へ留学。帰国後に一色庸児と結婚する。（一色義子『河井道と一色ゆりの物語恵のシスターフッド』キリスト新聞社、2012年12月25日）

24) 桜井彦一郎…桜井鷗村とも。巖本善治の推薦により、女子英学塾の教員となる。1892年に明治学院大学を卒業する時すでに、女子教育に携わることを決意していた。1899年から半年間程アメリカに女子教育事業の視察。その時の案内役が新渡戸稲造とアナであったことも女子英学塾就任に影響している。（亀田帛子『津田梅子 ひとりの名教師の軌跡』双文社出版2005年3月10日、188頁、202頁-203頁）

レ氏方の茶話会へ（■ツことわりし赴御出にてあひいず。安氏といろいろ■■■■■■■■の事話す。明後のを約して帰り。■は五時半日ハ多分、二月十六日と内定。  
エルキントン氏より手紙参す。返事来■来■当時に書きし、手紙の返事くる。

A-⑳ 1909年1月21日 木曜日

朝日の今日にて父母上が安氏を招かれしまく。参り手料理にてとて午後料理にとりかかる。茶碗むし、汁、百合きんとん、煮したし。などなどこしらへ、其他さしみ、■焼きなどしたくす。雨降りしも夜前やみぬ■  
■なし。六時に御出。姉上も招き、父母上、安氏、姉上、私と五人にて参り室にて食事の快談す。食事後母上かの元旦祝にはなし九十二年の■■■など示し給ひ笑う。えはがきフォトグラフアルバムなど御覧に入れ姉上と女子教育の談し給う。夜おそく十時半御帰り  
朝ミセス・ニトベ御来訪姉上事務室にて其新調の服、御目にかけぬ。

A-㉑ 1909年1月27日 水曜日

朝用事す。午後一時安孫子氏来訪。姉上方にて一寸話給うて何日まで■ふ。日米新年号と加州の蒲萄の汁御持参被下■汁ハ母上の御申出にて式後の晩餐の折ニ葡萄酒の代用によろしからんとて味見しにいと風味よろしく■■■よろしからんと申さる。ニダースありと■に母は御出のよし■にて話す。新渡戸先生式に■■■など■■■行■■■式後の披露宴にて精養軒にせんかと■うよし。式の事など話し五時頃御帰り。文学会あり桜井の外遊談ありしと裁縫す。母上を手伝い給う。  
朝は片付けものす。女中たつ、はる、ちりへたき衣服など遣す。

A-㉒ 1909年2月3日 水曜日

朝母上と電車にて買物にいで、教文館より白牡丹それより新橋関口より博品館へ行。柳■■■もとめぬ。雨ふり出で佐竹より傘かり帰る。二時近くなり昼食す。平田とし子氏来訪小買物や柳■■■来る。ミス・ナターに■■■戴く。ヲレンジの花と

■づ。当日頭の飾にとて求めぬ。

夜ミス・ナターとジャクリン氏へ話しに行く。かの地にて家政の事申さる。

夜安孫子氏来訪。母上■■■氏かと思いで姉上方へ御

■じ申す。式は廿日の方にも■よろしく、且つ小崎氏の

教会もよろしからんとの御話にて母上姉上あい給ふ。

尾本ちや子妹麻布内祝に訪ね下る。行度存ず。■よれしよし併合。

A-②③ 1909年2月6日 土曜日

朝姉上と電(車)にて芝三田■■町の宮様へ参上。妃殿下に拝謁す。

久々にてご面会の■物より戴く。婚儀の事姉上申上しに■■■

御用掛より御上内に達し「須藤(■■■■…以下13文字程判読不明)」と

の■■■き御意、それより内々なかり今秋迄■■■御渡英にて

欧州御巡回の御都合にて御用掛外に■身を隨行に仰付承る。

御見■なりし由の■■■き御■あり。御■■■の反物■■■ちりめん

一反と承らし世話になりし、記念にとてロンドンより来りし■■■卿の

ピン贈■に■■■王殿下に■■■姉上とわかれ

高輪姉上方へ行く。(■■■■…以下19文字程判読不能)

帰る。車にて麻布兄上方へ来る。安孫子氏と■■■ハ食事に招かれ

居るなれば、六時に食事、同氏時米意見兄上と話し

雨ふり■■■十時車来て居られし、またおそくなりしと

て一泊する事とし、電話を■町へかけ置く。

一時頃まで兄姉上と話す。

A-②④ 1909年2月8日 月曜日

朝より仕事す。午後ミセス・ジャクソン参り給うに、おくらるる。

■を撰定せん■をたのみに参りぬ。

午前姉上安孫子氏を晩食に招き給う。

午後一安藤夫人来塾。薙刀を見せぬ。渡米

同船したくなども話さる。

A-②⑤ 1909年2月10日 水曜日

朝姉上代理にて宮様御けいこの事に赴き学習院女子部へ  
安井哲子氏面会に行く。斎藤峯子、野口先生にも  
一寸（ちょっと）あう。今日婚礼招待状、此夜出来上りしを、今朝  
土屋茶次郎氏に表書依頼。■らへ出す。午餐に新渡  
戸家へ招かれ、姉上と行く。■■■かにすぎるなり。  
新渡戸博士を夫人ら今日参■■給ふ。■■の身を  
くり合せ、御招かれし也。安孫子氏十二時半に来る。  
新渡戸先生一時に帰宅。それより食卓につき六人会食。  
それより先生書斎にてコーヒー出で、かのパンフレット上■■■■  
出し話す。先生の御なりのカレクンコンなどみる。杉村  
■子にも安孫子氏紹介されぬ。三時御帰り。姉上と此身の■  
■しく有り。夫人と話して帰る。

A-②⑥ 1909年2月13日 土曜日

朝より来賓多と土屋・伊知治より祝物鈴木・河井氏分もあり、鈴木氏  
祝いに御出で。衣類■■すあけぬ塩谷栄氏も祝に御出で。  
今度■■料理正木たえ子、渡辺百合子などの料理■後の■■日とて  
食堂にて一同と会食。  
渡邊・望月・森・■本よりと北南寮生より祝品贈らる。  
夜、安（孫子）氏家に来訪太平洋■■■■■にかし■式に■びにて日米  
間問題につき朝野の名士■意見をきき■■意見■■機会ありてごいしな  
どきく  
(以下6文字程判読不明)

次郎■ぬし梅姉上傳多野氏記念会へ行かれ、夜帰りに御出で  
安孫子氏も居る■■にて一日■く■いたし十時過ぎにて話し行かる。

A-②⑦ 1909年2月17日 水曜日

朝よりかたづけもの、麴町へ買物に行く。  
今日新築の家にて母上■■と承り分別をかねて南寮  
の塾生一同を指導す。二時より五時までの間にていと雄々しく  
話す。大■すしに菓子にみかんを出す。生徒の外には  
斎藤氏・光崎氏・三浦氏・林喜代子氏を招く。河井氏も

御出ミセス・ジャクソンと姉上も…

夜平田氏祝に御出で

夜久太郎氏御出にて新宅へご案内して御覧に入る。

それより宅■へも御出になる。いろいろ話し且相談す。母上とともに。

A-28 1909年2月19日 金曜日

朝まり姉上麻布へ行かれ、午前津田母上当町へ御出で久々にて御機嫌よろしき御■をいす。御全快にて参り、今回の婚儀のため御出■■■也。トランクを大森へ移しあずけ行く。着物をつけ午後にて旅行の荷造などす。

祝に来りし人もあり、ミス・ピンコットあり使者も来る。ミセス・ニトベより電話もかかりぬ。

いと人賑わし。今夜わかれの意とて母上の御心つらしの御■■■あり。

津田母上・梅姉上と御両親と私と五人にて食事す。

食事後、久太郎氏来訪。津田母上に初対面の御打合せなどありて十時御帰宿。

夜一時過ぎまでも眠れず。須藤家の一人として最終の日なれば、感いと■らくして。

「日米」と中央に結婚の事出づ。

雨ふりぬ。

A-29 1909年2月20日 土曜日

我が生涯に記念すべき、結婚日なり。前夜の雨晴れ快晴にて皆々より喜びの祝詞を言わる。朝より髪ゆひなどの支度に取かかりぬ。ドッジ夫妻より白の美しきカーネーション贈らる白リボンにて花束として持参くださる。

新宅の新風呂に母上の■にて■■■に入浴身を清めすべて新調の衣裳に着替えぬ用意の黒紋附に白二ツ重さね、例の新らしき金入の丸■しあぬ、■に飯■斎藤氏の心入ルて赤飯出わぬ。

かみは加藤たえ子氏の手伝いにてゆひ三時前に■■■出来ぬ。初枝もよく上野兄姉ます姉上次郎兄上梅姉上に御あいさつ申、父母上にもお礼を申上に付に安孫子氏よりの迎への馬車に小崎弘道氏夫妻と同乗五番町をいで式場九段教会へと向かふ。■もみる四時、式を始めぬ。本多庸一・

山鹿■■司式■■氏のマーチにて大倉嬢と道子と花をもち神の御前に■■  
■■の兄上結婚の式を滞無くすませぬとマグリン来る。教会にて■  
それより馬車で参り二人と小崎夫妻とすぐ精養軒へ給う。衣かへて食堂  
にて一同の

来客に接待す食堂開かれぬ。■上梅林のかざり■し■人数の来賓にて  
■な事宴会なりし■■ハ小崎氏・新渡戸氏・田村氏・大倉氏・宮尾■  
氏・土屋氏

それより衣かへ■■に■■氏と二人馬車■の人となり新橋へ（以下10文  
字程判読不能）

■■寺に送られ横浜へ来る。始し（以下20文字程判読不能）

## 史料B群 久太郎から余奈子への手紙 1909(明治42)年1月1日、8日、12日

B-① 1909年1月1日

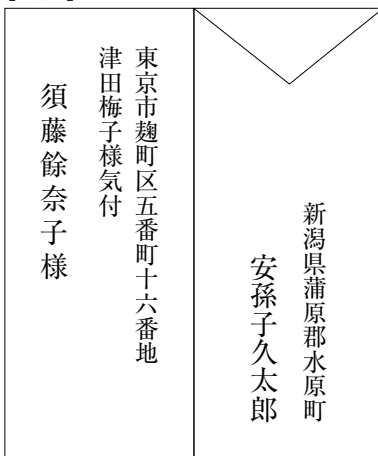
[一枚目]

最愛のわが佳耦尔余は茲に御身を余か生涯の伴侶として覚悟候之優渥なる皇天ニ向て衷心より感謝の意を表し申候。余は在米の当時より現今日本於ける婦人社会の境遇と余一身の特殊なる事情とより燃想して理想的配偶者を得るのいとも困難なるべき事を予知致し居り候。所々此問題の解決は一に天意は存さるものなりとなし、唯時機の致るを待つ

分なる事と覚悟罷在候。然るに何ぞ図らん余が帰朝後、僅かに十数日を出でずして御身ヲ如き余が理想

ニ副へる良婦人をわが故国ニ於て見る事あらんとは而して又其後数句を出でざる今日御身をわが最愛の佳耦よと呼ぶの愉快ニ幸福とを得る尔至らんとは是れ実に余が夢尔だも想致シ能いざりし処ニ有之候。嗚呼最愛のわが佳耦よ、是れ皆奇しき摂理の御手が我等を導きて茲尔至らしめ給へる尔あらずして、何ぞかく考へ来れば軟弱なる我等の結合の裡尔も尚ほ深遠なる天意の存ずるあるを認めざるを得ざる尔あらざるか之を思へば感恩の念しに禁ずる能わざると全時に我等の責任の

【封筒】



[二枚目]

一層重且大尔なり行きつゝあるを感ぜざるを得ざる。誠ニ御座候。左れば我等は今後如何なる決心と覚悟とを以て上は天帝尔対し下は全胞兄弟尔対して励み且つ務むべきか余をして少しく之を語らしめよ。

余は今回日本ニ帰り来りて比較的社会の善良なる方向

を觀察し日本民族尔将来ニ向て多大の希望を以て満され居るものニ御座候。然れども全時ニ幾多の在非惡の社会の裏面ニ潜伏しつつあるの事実をも認めざるを得ず候。其重なる一二を挙げれば殆んど国民挙げて其天職ニ忠実ならざると家庭生活尔重きを置かざるの二事と存各人其天職ニ忠実ならず從而各階級の社会ニ於いて尊敬すべく偉大の人物を見出す事を得ず候へば皆家庭の神聖を無視す。從而風紀日々頹敗シ道義心月ニ消耗す。洵に慨嘆すべき次第尔御座候。わが最愛の佳耦よ、我等は日ならずして新に家庭を作らんとす。願くは我等の家庭をして情々且楽しからしめよ。我らの人格を修養する学校は家庭なり隣人を慰め且喜ハしむる聖殿も亦家庭なり家庭は実に幸福の泉尔して諸徳の源なり。願わくは我等の家庭をして、地の鹽、山の上の城ならしめよ。我等の故国なる

[三枚目]

日本の人も我等が身を寄する米国の友も皆来りて我等の家庭の裡ニ情々して且温かく、天來の和樂を分つ事を得せしめよかくして美しき家庭の感化力の如何尔偉大なるかと故国の人大尔知しめ代表的日本人の家庭の如何尔情状かを米土の知友ニ知しめ以て廿世紀文明の進運ニ向て貢獻する処あらしめよ。是ハ余が御身と共に力を致さんとする最も大なるものの第一尔御座候

余は二十有余年間米国ニ遊び米国的教育を受け多く米人と接近して其感化を蒙りたるを以て思想感情の自然ニ米国化したる傾向を有シ候御身は重に日本ニ留まり日本的教化の下ニ成長したるならんも久しく米国ニ在りて全然米国的の教養を受けられたる姉下の下ニ人となり、又比較的多数の米国人間尔親友を有するを以て不知不識の間ニ米国化したる処あらんと存じ候。此故ニ余は御身と趣味感上の上ニ於テ大ニ一致する処あるべきを想へ。洵ニ喜ばしく相感じ居り申候。日本も同情罷る日露戦争を経て世界列強の斑ニ入り今や東洋の盟主として将ニ一大飛躍を試みんとするの機運ニ際会致し候嚮きに英国と全盟を結び續いて



佛露両国と協約を締結し今又米国と覚書を交換して

---

[四枚目]

互ニ親交の意を表するニ至り申候。今後日本が最も力を用ふべきは地勢上清国と米国の上ニ有之候べく候。而して清国の事は我等の興り知る処ニあらず候得共、米国との関係ニ至りては我等の責任の頗る重大なるを感じざるを得ず候御存知の如く今日の外交は政府と政府との関係とは人よりは寧ろ国民と国民との関係ニ相成候。殊ニ日米間の外交ニ至りては其度の一層切なるものあるを相覚へ申候。左れば今日以後日米間の関係をして円満ならしめんとせば勢ひ日本国民の代表者たる位置ニある我等の行動ニ待つ事の大なるを思はずんばあらずと存じ、此の天ニ於て御身が多大の興味を有するものなる事を知り余は洵ニ嬉しく相感じ申候願くは我等をして華美にして浮薄なる官僚的外交家なる事を遠避け質素にして堅実なる国民的外交家となり国家の爲め聊か貢献する処あらしめよ。是れ我等が共ニ力を致すべく重なるもの第二なりと存候。

余は過去十有余年間米国ニ在りて諸般の事業を維榮する尔当り常ニ余の念頭を離れざりし事は公私利害の一致ニ有之候換言すれば余一身上の利害は直ニ公衆の利害と相関シ公衆の利害は又余一身の利害と相関するの方針を採り来り申し候此の如く余は凡その場合ニ於て公益を中心として事業を

---

[五枚目]

維榮シ来り至るを以て去人の所謂成功ニ達するには比較的長期の年月を要シ候。余は未だ事業ニ成功せしとは云ふを欲せず。然れども今日まで維榮せし事業が皆余が理想ニ副へる形式ニ於テ成功の途ニある事を信じて疑いざるものニ御座候今後余は御身を余が事業の伴侶として成敗共に責任を分かたん事を希ふ。然る時は余が成効は御身の成効となり御身の成効は余が成効と相成り不申従てわが民族の発展となりわが国家の隆盛と相成る。罷ニ候間相共ニ熱心之ニ従

事致度存候而して余の所謂事業とは唯物質の事業のみ  
ヲ謂ニあらずして精神的の事業をも相含み申し候。即ち宗教  
の伝播教育の普及及風俗の改良等其重なるものニ御座候。  
余は宗教的生涯ニ於テ御身と全一の信仰を以て進み行き得べきを  
想へ。実に此上無く幸福と存居り候。人間は帰着する処宗  
教的修養存じ宗教を解する人ニあらざれば人生の大問題  
を論ずる事相出来不申候。余は又御身が教育上ニ多大の興  
味を有し殊ニ女子教育ニ大関係を有するを非常愉快ニ  
相感じ申候。余は性来教育ニ甚大の趣味を有シ一時  
は自ら教育家ならんとの希望を抱きし事もありし程ニ有之候

[六枚目]

然し故ありて一身を実業界ニ投するニ至りしも余は尚ほ教育家的実業  
家を以て自ら任するものニ御座候。故ニ余は常ニ実  
業を以て社会を教育せんとの志望を有し居る次第尔して是れ  
余が御身と一致し得処なれば、今後相共ニ力を致さんとする  
重なるもの第三に御座候。

此外申述度事数あれども之は他日ニ譲り終りニ一言致し置き  
度は御身が養父母ニ対する孝養心の厚き一事ニ御座候。

古人も云へりし如く孝は徳の本なれば孝心厚ふして不性なるもの  
は古来洵ニ稀有ニ御座候。先日も御話し申上候通り余は幼  
尔して母を失い又久しく以前ニ父を失い孝養を尽さんとするも  
之を尽す能ざりし尔、今回図らずも御身を余が生涯の伴侶とす  
るニ至りなると全時に尊き新しき父母を得たるを余ニ取りて如何  
斗りの幸福ぞや。最愛のわが佳耦よ願くは余をして御身と共に  
赤誠を尽して孝養を全からしめ而して孝子なるの榮尽  
を担わしめよ皇天願くは御身をして今日あるニ至らしめ給へし  
老父母の上ニ祝福を垂れ給へ終ニ臨み恭しく新年を  
賀し奉る

明治四十二年一月元旦不可思議なる摂理の下ニ廿七年振り尔故郷の  
雪下ニ新年を迎へたる

須藤余奈子様

安孫子久太郎

B-② 1909年1月8日

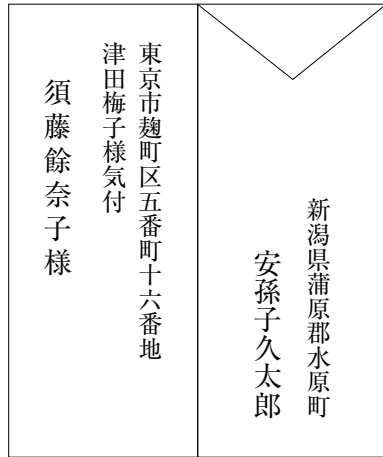
[一枚目]

去る四日夜御身が赤誠を尽して御  
認めの御返書正ニ落掌致し候実ニ  
やさしき御真情の程益れん斗りニ  
紙面ニ相顕はれ洵ニ喜はしく相感  
じ候俣

幾度となく擦返し通読致し居り候。  
思ふに御身をわが生涯の味方とし  
て得たるは勇敢なる百萬の兵士を  
得たるニ優り其喜は天下の富を一  
身尔集めたるよりも大いなるもの  
有之候。御身の温き全情のあらん

限りは余は天下を欺とするも恐るる処更ニ之無候。其後日に増し御身  
を思ふの度益々相加はり心中無限の喜悦と希望とを  
以て満され居り候。催余は去月卅日当地到着以来  
殆んど毎日朝早くより夜深厚尔至るまで親戚旧友ニ対  
する応接ニ寸暇も無之度々書面を差上度存居りしも其  
意ニ任せず候段、御推察の程願上候。実は本日頃当地を  
発し新潟へ赴き兩三日滞在の後遅とも十二日頃帰京

【封筒】



[二枚目]

致す筈ニ有之候処久々爾て帰省せし事とて此方よりも切  
なる希望之を断る訳ニ参り兼ね候俣予期の  
如く当地を去る事相出来難く候ニ付帰京の義は  
十五日頃と相成り可申候。其節は直ニ御身の許を  
尋ねて面のあだり将来の事ども相語り、互ニ相喜び申さば  
やと今より夫れのみ相楽しみ申居り候  
余は帰京後孜二三週間は外務省を始め其他知名  
の政治家諸氏を訪慰して対米問題ニ関し少しく  
運動相試み聊か米全胞のため画策する処有之度  
又全時ニ将来の事業維榮ニ関しても種々奔走致度  
存居り候。以も右相済み次第直ニ御身と共に数週

間京阪地方尔遊び天然の美なる風景を友として  
互ニ精神上の修養を務め我等の新なる生涯ニ対する

[三枚目]

準備ニ取掛り度希望罷在候。詳細の事は何れ帰京の上篤と御相談可申候。余は兩三日中ニ当地出発の筈ニ付御返事を煩はすの時日無之ニ付帰京の上親しく相伺可申候本日は親戚旧友諸氏を招きて答禮寿留酬会相催し候筈ニテ多忙ニ付是尔て擲筆致し候間御許し被下度候。末筆ながら御両親様へよろしく御伝言の程切ニ奉願上候早々  
一月八日朝 安孫子久太郎  
須藤余奈子様

B-③ 1909年1月12日

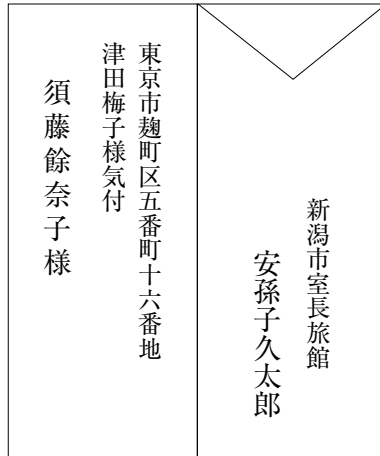
[一枚目]

数日来天気俄かに相加り候処何の御障りも無之候我北越ニ於ける此頃の寒さは一際厳しく御座候得者幸ニ異状無之候間御安心被成。下度候。去月廿日着郷以来殆ど二週間一日として寧実なくすで尔親戚知己智人より洵ニ手厚き待遇を受け実ニ身ニ余る光榮と存居り候。就ては滞在中の出来事二三件御参考まで可申達候

先般帰省の際余の為め歓迎会を催

す者有之候由の処滞在日数の短からし今日之を御相ず能わざりしを以て今回の帰省を機とし、去る五日午後三時より古川亭ニ於テ町長助役等を始めとし郷里存附近ニ於ける知名の人士式十数名相会して、洵ニ盛んなる歓迎の宴を催し申居候始めニ集会者一同を代表して町長佐藤友右衛門氏の歓迎の辞あり之ニ対し余は簡単ニ答辞を述べ後

【封筒】



宴会尔移り間もなく余は再び立ちて日米問題二つき  
 約一時間ニ渡る演説相試み候処満座一同熱心ニ  
 謹聴致し申候後佐藤町長之ニ対する謝辞旁

[二枚目]

三十分斗り演説有之一同十二分の歡ヲ尽しテ七時半頃散  
 会致し候。又去る九日尔水原尋常小学校の始業  
 式ニ招かれ数百の男女児童ニ向って一場の御話ナク■申候  
 該校は故叔父町長たりし時、率先して之が建築奔  
 走せし由ルテ町民一同感謝致し居るとの事を聞き、洵ニ  
 嬉しく相感じ申候。余は曾て幼少の時此処ニ通学して  
 普通教育の初歩を授けられたるものなるが、尔来三十年  
 を経過したる今日、不思議ニモ其の校堂ニ立ち当時の余と  
 略ぼ全様の学童尔向って一場の訓話を試むる尔当日りてや  
 新た今昔の感ニ堪へざるもの有之候。殊ニ余と今般生たりし  
 江口某氏余を紹介旁余の児童生活の一斑を述べ候際  
 の如きは殆んど感極まりて、再び昔の児童ニ生れ返りしが如き  
 感想を抱き申し候又ある頼の事、一老嫗余の許を尋ね  
 来り候本年八十一歳なる者なれども仲々元気成もの尔て  
 若者を凌テの風有之候。彼女は余の生れシ時余が母の乳  
 不足なりし為め約十日間余に乳を與へ呉れし最初の乳母  
 なりとの事ニ御座候。こん回余の帰省の際余尔會たさの余り

[三枚目]

数回我家の門口まで来りしも其身の賤しくを恥ちて家尔  
 入らざりし由、余は今回之を聞き如何ニも懐かしく相感じ候  
 俟遠慮なく来るべく旨申送り候処、喜び勇んで尋ね  
 来り。夜深更ニ至るまで昔相談を打続け時の移るを知らざりし  
 如く有之候。余は彼女より母の臨終当時の光景及余嬰兒  
 時代の有様等逐一聞く事得。洵ニ異様の感ニ打たれ申候。  
 此他申述之有度多く有之候得共何れ近日御面会可致ニ付  
 其節篤と御話可申候  
 余は昨日午後一時半親しき親戚旧友と相分れ最愛の御身と共に

新なる生活を営まん為め、勇しく郷里を出発致し候二十七年  
前無謀の■■■たりし余が何事をも家族ニ告げずして飄然  
郷閩を脱せし當時を追想して只管其変化の大なる驚き申  
候。昨日当地着本日数名の知人を訪問し明晩は当地の有  
力家桜井市作氏の招待ニ応じ、明後十四日の夜汽車かも  
しくは十五日の朝汽車ニ而帰京の途ニ就き可申候ニ付兩  
三日中尙は最愛の御身と再び相会するを得べく夫れのみ  
朝夕樂みし居り申候。帰京の上は

---

[四枚目]

直ニ御尋ね可申候間左様御了承被下度候  
末筆ながら御兩親様并ニ姉上様方へよろしく  
御伝声の程奉願上候早々以上  
一月十二日 新潟市ニ於テ  
安孫子久太郎  
須藤余奈子様

史料C群 その他はがき・手紙 1908(明治41)年11月10日、12月15日

C-① 1908年11月10日 久太郎歓迎会の招待状

<p>麻布本村町二三九 津田次郎殿</p> <p>出席</p> <p>大陸殖民合資会社 井上平三郎</p> <p>41.11.10</p>	<p>拝啓多年米国ニアリテ在米邦人発展ノタメ貢献シタル 安孫子久太郎君今回帰朝相成候ニ付来ル十一月十四日 午後五時芝公園紅葉館ニ於テ歓迎会相催候間万障御繰 合セノ上御貴臨相成度此段得貴意候也</p> <p>明治四十一年十一月九日</p> <p>発 島田三郎 本多庸一 菅原 傳 竹村良貞 日向輝武 丸山 嵯峨一郎 起 高橋光威 小崎弘道 高木益太郎 市島謙吉 服部綾雄 井上平三郎 人 山村模次郎 大倉文二 藤原俊雄 青柳郁太郎 田村武治 大竹貫一</p> <p>一 準備の都合有之候ニ付御出席ノ有無十二日迄ニ御一報相煩度候 一 会費金二円五十銭当日御持参被下度候</p>
---	--

C-② 1908年12月15日

前略 本日大倉氏御面会致、当  
方之都合等申述候處、後  
日之誤解有之候而ハ不相成候次  
第二付、決して急ぎ不申充分  
御調査御考慮置何分之御決意  
相成被度トノ返詞ニ候間、故<sup>ことさ</sup>ラ日を  
期し返答ニハ及不申候。左様  
御承知被成度候。尚当方之調  
べ度廉々ニ付而ハ、同氏へ直接問  
合候も如何ト存候へし故差扣  
へ、之レ等ハ他の法方ニ拠り兩三日  
中御取調可申被存候。貴方ニも若  
し御心当

【封筒】

<p>市内</p> <p>須藤餘奈子様 御親</p> <p>麹町区五番町十六 女子英学塾内</p>	<p>十二月十五日夕</p>
---	----------------

も御座候ハバ御問合セ被下度候故、  
仰之方ハ大倉氏より彼是御承知致  
候ニ付、先安心と存候へ共、川<sup>〇△</sup>  
上氏同地ニよき知り合有之候趣<sup>△</sup>ニて為念  
問合セ呉候筈ニ付、不日相分り可申ト  
存候  
先ハ右不取敢申入候事 可悦  
十二月十五日夕 栄三郎  
よな子様